

---

# ニルレイ

ヒュウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ニルレイ

### 【Nコード】

N1521H

### 【作者名】

ヒュウ

### 【あらすじ】

その日から『人間』は希少種になった。

## 序章 山奥に住む老人の話

……お主の問いに答えるのは、いささかわしには難儀なことだ。思い出したくないこと思い出させる。……が、まあよい。わしの場合を話してやろう。おぬしにはしつてもらった上で聞きたいことがある。

わしはとある小さな街の大工をしておった。妻子もいてな、妻はわしにはすぎた美しいやつで、子の二人もわしには似ず頭がよくて、自慢の子たちだった。その街は発展途上でな、これからというときだった。そのため仕事の依頼がわんさかあつて、毎日が忙しくも楽しかった。あのころは本当に、良かった。

だがそこへ、まさに幸福を謳歌しているときに……忌々しくもやつらが突然にやってきた。

そつえばお主はやつらを見たことがあるのか？

……そうか、あるか。ではわかるだろう、あいつらの恐ろしさが。今でもわしの脳裏にはやつらの姿形がはつきりこびりついているよ。

どろどろとした透明な液体が、人ほどの大きさで、地面をなめるように進むあの姿を。巷ではラギアス地方の民話の悪戯な水の精霊

の名をもじって、アープスというそうじゃないか。だがわしにはなぜがやつらをそう呼ぶのかわからん。あれは恐ろしく凶悪なものだ。民話のような人々をからかうような生易しいものでは断じて違う！

……………すまない、つい感情的になったしまった。お主にとってはどうでもいいことだな。どこまでわしは話したんだ？……………ああ、やつらが襲ってくるどころか。

1番最初にやつらを見たのは、ほかならぬわしだった。その時ちようど物見用の櫓を外壁の上で大工仲間の連中と作っておったからな。街の誰より高いところにいた。日光を遮る雲が一つもない快晴のなか仕事に勤しんでいると、視界の隅で何かが光った。そちらを向くと、地平線上に太陽の日差しを反射させ何かが何百何千とそれこそ大量に押し寄せてきた。ものすごい勢いでな。それがやつら、この名でいうのは抵抗があるがアープスだった。

やがて他の大工仲間も気付き、まだ遠くのため、不明瞭な正体に戸惑いと不安にはなりにはしたものの急いで門兵に報告し、門兵はそれをどこかの国の軍勢であろうと推測して、街の門全てを閉じて、やつらを迎え打つ準備をした。わしはなぜだろうな……………好奇心混じりにその光景を見たくなって建設中の櫓で眺めていた。

やつらがすぐそこまで来て、姿形がはっきりわかったとき、わしを含め見た者全員に恐怖に包まれ、混乱におちいった。お主も始めてみたときそうであつただろう？

動揺が隠せないままの戦いになったが、わしら人間はやつらには全くの無力だった。矢がその身を貫き、投石が原型すら留めず潰しても……やつらは再生し、些細な傷すらつけられなかった。

そしてやつらは自由自在に変えられる能力を利用して、門扉の間から街のなかへ次々と侵入した。そのあとはもう阿鼻叫喚だ。

人間一人に対して一匹ずつやつらは襲い、その透明な体に取り込んだ。そうなるとやつらは急に白くなり、まるで石像のようになるものだから、中がどうなっているのか見当がつかず、それがなおさらわしを恐怖に突き落とした。

その光景が辺りでおきていながらも、わしは櫓から下り家族の安否が心配で懸命に家族の元にむかった。家族と合流すると、せめてこいつらだけとは思ったんだが……何ができたというわけでもなく、呆気なくわしらはやつらに飲み込まれてしまった。はちみつのようなべたべたした液体に飛び込むような不快さを感じた瞬間わしは意識を失った。

気付いたときは、わしは倒れていた。どこも痛みはなく、普通のように見えた。立ち上がり辺りを見回しても、家族や街の人らがいともやつらはいない。しかも家族もただ気をうしなっているだけだった。危機は突然やってきて、そして去っていったのだ。わしはそう思い、安堵のため息をついた矢先、いい様のない悪寒が体を駆け巡った。

何かわしの中に巣くっている。確証のないあやふやな感覚にもかかわらず、なぜかはつきりとわしにそう意識させた。そしてそのあやふやな感覚はわし以外の家族や街の人々の中にも何かが体内にいると知らせた。……………どうしようもなく恐怖だった。気が狂いそうになった。

その場に居たたまれなくなったわしは、はじかれるように逃げた。当てもなく、ただ夢中で。恐怖を振り切るように。

そしてようやく足をとめたのが、こんなへんぴな森の奥だ。人と隔離しようとした結果だった。おぬしのような旅人が本当にまれにおとずれることがある。ついでにいうとお主は五人目の訪問者だ。奇遇なことにその五人とも「人間」だった。だから会うことができただろうな。視認しなくても取りかれている者が近くにいて心臓をわしづかみされている気分になるからな。

わしは一生をここで終えるだろう。街には二度ともどるつもりはない。家族のことはもちろん心配している。だがわしは恐いんだ。己の内に巣くう一匹のものにすらびくびくしているわしだからな。家族とあつたとき本当におそろしい。

これは拒絶反応というやつらしいな。三人目の旅人から聞いた。わしとわしの中に寄生してアープスとが極端に相性が悪く、反発しあい、他のアープスの存在がそのことをさらに悪化させる、と。稀な例とも聞いた。大半な寄生された人は何事もなかったように普通の生活を続けているわけだ……………普通にな。相性の良いものは特殊能力や強靱な肉体、素晴らしい英知が発現するので、寄生されてよ

かったという理解できない声もあるらしいな。嘆かわしいことだ。

これでわしの話はおわりだ。すまなかったな。つい長話になってしまった。許してくれ。で、どうだ参考にはなかったか。

……そうか、それは良かった。わしも話したかいがある。ではかわりといつてはなんだが、一つ質問をいいか。あの日世界中の人々がやつらに寄生され、されてない人間のほうがわずかになってしまった。その世界を見て、お主はどう感じる？

「人間」の旅人よ。

## 序章 山奥に住む老人の話（後書き）

モバゲーで書き始めた小説なのですが、ここでも見てもらいたいな  
と思って投稿しました。

読んでいただいた方、ありがとうございます。

それにもなつて諸都合で更新が止まっていた筆者の別の作品も再  
開したいと思います。



## 第1章 人間の旅人1

大陸南部にある街ホネド。

このホネドを間にはさんで、大陸中部からの商品が南部に流れ込んでいき、逆に南部の特産品もホネドを通して中部に運ばれる。人々の交易の要所であり、そのために発展を遂げてきた街だ。

そのような背景のある街に正午過ぎ、一人の男と一人の少女がはいってきた。風貌から旅人と予想できる。

男は赤い髪と精悍な顔つきが目立つ。

少女は長い金髪と端正な小顔が目を引く。

美男美女に属しているためか、あたりの人々から好奇の視線が旅人達に集まる。

だが違う反応をみせたものもいた。近くの建物の屋根に手持無沙汰そうにぼんやり座っていた少年がその旅人達、特に男のほうを見た瞬間、目の色を変え飛び降りきた。

「シンっ！」

嬉しそうな少年の馬鹿でかい声に、旅人達がそれぞれ異なった反応をする。少女は不審気に近づいてくる少年を見つめ、シンと呼ばれた男のほうはよお、と笑顔で軽く手を挙げる。

「久しぶりだな、おい。元気にしてたか？」

笑顔で少年は拳を突き出し、答える。

「見ての通りぴんぴんしている。そーゆーあんたは？」

男も拳を前に出し、二人は挨拶とばかりに互いの拳をガンッと軽くぶつけ合った。

「それこそ見ての通りだ。有り余った体力を何に使うかがいつも俺を悩ませる」

男はふてぶてしい笑みを浮かべる。

「何いってんだか。相変らすの減らず口」

「おまえと似たり寄ったりだろ」

二人は笑う。

それから少年はシンの横にいる人物に目を向ける。視線に気づいた少女はずっと後ずさりしてシンの後ろに隠れてしまった。

「ああ、こいつの紹介がまだだったな。こいつはリノン。ちつとばかり顔見知りか、激しいところがあるが、悪気はないんだ。ゆるしてやってくれ」

ポンッとシンの手を頭に載せられ、リノンは顔を赤らめた。リノンはシンの言った通り恥ずかしいのだろうか、言葉の代わりに軽い一礼をあいさつとして少年に送る。

その仕草があまりに可憐だったのでそれだけでも気をよくした少年は、しまりのない笑顔で顔を崩した。そして慌てて自己紹介。

「あ、おれの名はニルレイ・ニルニアー。この複雑な街の頼れる案内屋だ。ニルって呼んでくれ」

リノンはそう名乗るニルを改めてみる。黒い髪に勝気な瞳。活発そうな少年だということが一目でわかりそうな雰囲気を持っている。

そんな第一印象を受けていると、ニルは突然何を思ったのか血相かえてシンのほうを見た。

「まさか、シン、大人の女じゃ手が出せないっていうんで、年下に目をつけて心が真っ白なうちに自分好みにしちゃおうって」

「あほ」

「ほんと鈍い音がした。」

「いって~~~~~っ」

あまりの痛さに殴られた箇所である頭を押さえてその場につずくまる。相当痛かったのか目に涙をためている。

「なぐんなくつてもいいじゃんかっ」

上目づかいに抗議しても、

「馬鹿なことをいうからだ」

とシンはいい放つ。

「それより、ほら仕事。イオット一丁とそれ弾をできるだけ。待ち合わせの場所として安くてうまい飯屋を先に案内してくれ。昼過ぎだしな、腹が減った」

上着の内ポケットの中から金貨を一枚としだして放り投げる。その金貨をしかめっ面でニルは受け取った。

「わかったよ。でもなんでまた同じリフレクなんか買うんだよ。こわれたのか？」

「いんや。前のはこいつにくれたんだ。おれより腕はいい」

シンが自慢げにリノンの肩に手を置く。ほめられたために再びリノンの顔に赤みがさしている。

リフレクとは、反晶石という不思議な石を利用した武器の総称だ。反晶石の種類によって、性質も異なっており一概になには言えないが、多くの反晶石が属している内包型と言われる分類の反晶石では、自然界の何らかの現象を起こすことができる。それを武器に生かしているのが、リフレクと呼ばれる。

例にあげると、火を生む赤色の反晶石を使って炎を纏う剣といったブレイドタイプのリフレクを作ることできる。創意工夫でどんな武器も創ることが可能だ。

イオットはガンタイプのリフレクで、衝撃を圧縮して打ち出せる。非力な者でも関係なく威力を発揮するので扱いやすい上に新しいタイプのリフレクなので、たださえリフレク全般はずいぶん高価なものでおいそれと手を出せないしろものだ。

「シンよりうまいなんて本当にうまいんだな。すごいじゃんかつ」  
ニルは感心している。

「だろ？けどそうなるとおれの分がない。リフレクは高価だが旅人一人に一つはあったほうがいいからな。だから頼むぞ」

「まかせろ！じゃあ、遅れずについてこいよな」

ニルはそう言つと返事もきかず、どんどんと街の中に入ってしまった。ついていこうとしたシンの袖をリノンは掴んだ。

「ん？どうした？」

「あの人は信用できるんですか？」

シンは力強く頷く。

「ああ。少し生意気だが悪いやつじゃないし、むしろいいやつだ」

「どうやって知りあったですか？」

意外な問いにシンは不思議に思う。

「気になるのか？」

「はい、どうやってシンさんであつたのになって」

ダメですか？とリノンの目が訴えかけてくる。どうしたもんかと迷った末、答えることにしたシンは口を開き、控え目な声で言う。

「はじめてこの街に来た時に、あいつがチンピラにからまわれていたのを偶然見つめたのが最初の出会いだったな」

「それでシンさんが助けたんですね。さすがですっ」

話の落ちを勝手に推測したりノンは、あらん限りの尊敬をこめた瞳で見つめた。シンが気まずそうに外す。

「……………いや、実は俺が助けのはチンピラのほうで……………死にそうだったのはそっちだったし」

「え？今何かぼそつといいましたか？」

もう一度言葉を聞こうとリノンは耳をすます。が、シンはその話題を流した。

「いや、まっ、ともかくあいつは信用できるから、困った時、俺がいなかったらあいつを頼れよ。いいな？」

「私はいつもシンさんのお側にいるから、そんな事態ありません」

心外だというような少しすねた言い方でリノンは答えた。

「っってお前らっ。いい加減ついて来いよ！」



依然として後を追って来ないシン達に遠くからニルが叫んだ。

## 第2章 人間の旅人2

「ふ、食った食った」

シンは満腹感に浸り、一息ついた。目の前のテーブルには空になった皿が何枚もある。

「うまかったな、リノン。ニルの紹介した店、なかなかだろ？」

シンは上機嫌にコップに入った安いぶどう酒をあおぐ。

「はい。とてもおいしかったです」

向かい側に座るリノンも笑顔で返す。

場所は喧噪でさわがしい食堂。街の南西部は工業区であり、この食堂はその近くに建てられ、労働者達が休息の場所として愛されている。こういった店は他にいくつもあるが特にここは値段良し、味良しと人気のある食堂だ。時間が時間なので店内は客でこんでいたが、ニルはここでは顔が利くらしく店主の男に二、三言いっただけで、シンたちのために席をつくってもらった。

「そういえばシンさん。ここに来た目的は二つあるって言ってましたけど、ひとつ目は武器の調達で、もう一つはなんですか？着いたら教えてくれるって言ってましたけど」

「ん？ああ」

テーブルにコップを置くと、シンはどこか彼方のほうを見つめて

懐かしげに、

「旧友に会いに来たんだ」

「旧友、ですか？」

「そ、旧友。ガキのころ、一番付き合っていたやつで将来の夢なんかも語り合ったぞ。俺は世界一強くなる、あいつはどうか適当な街の支配者になるなんてな」

「素敵な話ですね」

リノンはえらくうつとりした顔をしているので、シンは少し焦って、

「割とつつこみ所じゃなかったか、今の？」

と言った。

「でもまあ、要は俺達は上を目指そうっていう野心的な性格が互いにあったから性にあっていたんだろうな。何かしらにつけては競争していた。当然いつも俺が勝っていたけど。名前はラトフっていうんだ。前の街でこの統治者がラトフってやつに変わったって噂をきいて、もしかしたらなんて思ってたな。あくまで噂で確証がなかったんだがさっきニルに聞いたら噂は本当だった」

「どんな人だったんですか？そのラトフさんは」

「なんだ興味があるのか」

意外そうなシンに、リノンは力強く頷いて見せた。

「はい。シンさんが昔どんな人と付き合っていたのか興味があります」

「……なるほど」

「どうかしました？」

「いや、何でもない。……ラトフの性格はな、そうだな……長らく雨が降って使っていない小屋から湧いた黴みたいなじめじめした性格だったな」

「破滅的に暗い性格だったんですね」

「毒舌に毒舌とは言つうようになったな……」

「ダメ、でしたか？」

恐る恐る上目づかいでシンを見つめる。最初は驚きはしたものの、一笑して、

「ハハハッ。いや、それだけ変わってくれたってことだ。嬉しい変化だな。初めて会ったときなんか世の中に意味なんかねえぞみたいな顔して無関心無反応だったからな」

「……」

リノンは嬉しいのやら恥ずかしいのやら頬を赤らめ、俯く。

と、そんなとき。

食堂のドアが開く音がして、ニルが現れた。部屋の隅にあるシン達のいるテーブルに手を振りながらやってくる。

「おまたせ。依頼通り、持ってきたぞ」

テーブルに布袋を置いて、椅子に座った。

「いや、交渉人の親父との一進一退の駆け引き。是非見せてやりたかったよ。あの金額でこれだけ買えるのはオレを含めて十人くらいかな」

「あなただけでないんですね」

「いいつつこみだ、リノン」

ニルの持ってきた袋の中身を物品しながらシンは言う。中身を確認したシンは感心したふうに頷いた。

「さすがだな、ニル。いい腕だ」

「へへっ、だろ」

ニルは得意そうにしている。

「ついでにもうひとつ頼みたいことがあるんだが………いいか？」

「水臭いなあ。オレとシンのなかじゃないか。もちろん金は取るけど」

「わかってる。リノンちょっとここでまっててくれ。俺とニルは二人だけで話がある」

「……………はい」

不満そうな不安そうな表情を隠そうとせずにリノンは首を縦に動かす。

そんなリノンを尻目に、ニルはシンの後について食堂の外に出た。面している狭い路地には人がまばらに行き交っている。

「シン、あの子も話に入れてやれよ。悲しそうな顔をしてたぜ」

頭の後ろで手を組みニルはシンの背中に向かって口を尖らせる。振り返ったシンは何も言わず改まった表情でニルに近づく。

「何だよ、シン？まさかおまえ女はあきらめてついにそっちの方向へ」

「馬鹿野郎」

言葉と共にごんつと鈍い音。先ほどより威力は軽減していためうずくまるほどではなかったが、頭をさすって抗議の意を唱える。

「いたいじゃんかつ本日二度目！」

「勝手なことばかりぬかすからだ。俺はリノンに聞かれないようにしたいんだよ」

「聞かれちゃまずいのか？」

「ああ。なにしろあいつについてだからな。……唐突だがお前はあいつを見ていてどういう印象を持った？おかしな質問とは思うが正直に答えてくれ」

その質問の理由を先に聞きたがったが、シンに急かされニルはリノンについて思考を巡らす。

「どうって、そうだな……可愛くて恥ずかしがりやなところがまたいいね。好みのタイプかな」

そう答えても、シンは納得のいかのそんな顔をしている。

「もつと他にはないか？些細なことでもいい。頼む」

そう言われてもう一度考え込む。シンはニルからの言葉を辛抱強く待っている。

「そつえば……」

「そつえば、何だ？」

ニルの閃きけている言葉にシンはくいついてきた。

「オレがりノンを見ると、いつもシンのほうを見てる気がするんだよな。オレのほうなんかほとんど見てなかったようだし」

嫉妬混じりにシンを見る。

「やっぱりか……………」

少し俯き、考えるシン。

「一体何がどうしたんだよ。説明してくれよ、シン」

教えてくれないシンを今度はニルが急かした。ニルの不満な気持ちが届いたのか、シンはニルを見た。

一瞬探るように目を細めたが、それから再び目を細めた時はなぜか笑顔のためだった。

「なあ、ニル。今から俺はちょっと出かなきゃいけない。しかも一人だ。だがリノンのことも心配だ。そこで考えた末、お前がその間リノンと一緒にいてくれないか？」

「いいのか？」

ニルの顔が輝いた。さっきまでの不満が微塵もない。

「ああ、お前みたいに人に好かれそうなやつが適任だ。というからおまえしかない」

シンがほめちぎり、なおさらその気になるニル。

「問題の報酬のほうだな」

「いいっていいって。オレとシンの仲じゃないか」

ニルが笑顔で制した。先ほどといていることが違う。



「じゃ、頼んだぞ。夕方にはここに帰ってくる。くれぐれも若さゆえの過ちのないように」

「おう。大船に乗ったつもりでいてくれ！」

別れの挨拶とばかり互いの拳を軽くぶつけ合い、シンのほうは曲り角の向こうに消えていく。見えなくなるまでニルは大きく手を振った。

「さてと。どうすれば親しくなるのかな」と

小躍りでもしそうな気分でステップしながら食堂内に戻った。

ドアを開けた際、隅にいるリノンと視線ががちあったが、すぐに外された。今は俯き、膝の上で重ねている両手を見ている。だが内心の喜びを表にまで出しているニルは全く気付いていない。ニコニコ顔でリノンの隣の席に座った。早速声をかける。

「リノンってどこ出身？髪の色からして大陸の北部の人かな？」

興味津津で聞くニルにリノンは俯きながら簡潔に答える。

「そうです」

「どこに住んでいたの？」

「レシンという村です」

「へえ、どんな村？」

「普通の村です」

話が續かない。相手が話をしようとする気が皆無のようだ。もっと相手が興味の持つものはないかと思案した末に、

「そついえばどうしてシンと一緒に旅をしているんだ？」

シンという言葉聞いた途端に、顔こそ揚げなかったものの、目がわずかに見開く。そして、

「親に捨てられていた私をシンさんが助けてくれたんです。シンさんのおかげで私のいきることができているんです」

急に流暢に話し始めた。シンがどれほどいい人なのか誰かに聞いてもらいたいそうだった。期待通り、いや予想以上だった。できれば外れてもよかったのに、とニルは若干肩を落とした。

「……シンのがことがホントに好きなんだ」

「……はい」

頬を朱色に染めて、恥ずかしがりながらも小さくはつきりと頷いた。

本当にシンにしか興味が無いようだ。勝ち目がないのかもしいない。しかしここで諦めるニルではない。シンに依頼されたことを遂行しながら少しずつ距離を縮めていけばいい。

「あのさ、オレ、君にこの街を案内したいんだけどいい？」

リノンの顔が照れからあつという間に怪訝な表情に早変わりした。ニルはリノンの警戒心を解こうと言葉を続ける。

「別にやましい気持ちはなきにしもあらずというかそれはまあおい  
といて、シンが一人でどこか行くらしくて、その間に君の面倒を見  
てくれて頼まれて、だから暇つぶしに街の案内でも        って、  
おい」

ニルの説明の途中、突然立ち上がり、リノンは外へと飛び出て行  
った。慌ててニルは追いかける。ニルが食堂を出ると、リノンが切  
羽詰まった顔で辺りを見回していた。視界をどこに切り替えてもシ  
ンの姿は映らない。

泣きそうな顔をしてリノンはニルに迫る。

「シンさんがどこに行ったのか知りませんか！？」

「いや、聞かなかったけど」

切実な問いに若干気圧されながら首を振ると、リノンは深くうな  
だれた。

「……シンさん」

小さく開いたリノンの口から漏れ出す声をニルは聞き取る。

この子にとってシンは必要不可欠なんだ、と思わざるをえなかつ  
た。

第一目標であつたリノンと親密になるという目標が降下し、リノンをシンに一刻も早く再会させるという目標が一位になった。別にあきらめたわけじゃないが、今はシンに会わせることがこの子のためだ。

「オレが何とかしてシンに会わせてやるよ」

ニルがそう言つてリノンが反応するまで、二、三秒ようした。

「……本当、ですか？」

すぐるように見つめてくるリノン。ニルは笑顔で頷いた。

「もつちろん。だってオレはこの街を知り尽くしている街の案内屋だぜ？情報網それなりにあるしさ、まかせてくれよ」

シン早く会いたいという気持ちと、シン以外の人に頼るという抵抗感。どちらの答えを出すのかを悩み、しばしの沈黙。そして、

「よろしく、お願いします」

とニルを頼った。

ニルは嬉しさと同時にこの期待に必ず応えようとやる気が満ちてくる。

「まずは情報収集か。そういうのにかがめついやつ何人か知っているからそいつらに当たってみるか」

動き出したニルの後について行くリノン。先ほどは困惑したがするべきことがはっきりしたおかげで、今はようやく少し落ち着いて物事を考えられるようになった。するとすぐにシンが話していたこの街にきた目的を思い出す。

旧友に会いに来たんだ。

「あ、あの」

「ん？何？リノン」

初めてリノンのほうから話しかけてきた。少し驚きながら振り返る。

「シンさんが言っていました。この街によった理由の一つにラトフさんという人に会いにきたのだと。もしかしたらシンさんはその人に会いにいったのかもしれないです」

「……あのラトフと知り合いなのかよ、シンは」

ニルは苦い表情を浮かべる。

「手掛かりを得たのはいいけど、どうしたもんか……」

「危険なんですか？」

リノンは心配で高鳴りする胸を押さえ、不安げに聞いた。

### 第3章 人間の旅人3

「これはまたえらく豪勢な屋敷なことで」

高価で重厚そうな絨毯を踏みながら、シンは廊下を彩る数々の装飾品に目を奪われていた。

どうして金持ちにはわざわざ無駄に高いもんを買っただろうか、これ傷つけたらいくらぐらい弁償するのだろうと、庶民感覚で置かれている高級そうな絵画などを値踏みをする。

シンは今、この街の統治者であるラトフの屋敷にいた。ホネドの北西部は、大商人など裕福な層の住みかとなっている。高級住宅が立ち並ぶその中の一際豪華な建物がこの街の統治者たるラトフの屋敷だった。

最初この屋敷に入ろうとしたが、執事に事前に会う約束を取り付けていないと会えない、また素情がわからないものなら尚更と冷たく断られた。そこでシンが自分の名をラトフに伝えるだけ伝えてほしいと頼み、執事がその旨を主に伝えると慌てて戻ってきて主が会いたいと今ラトフの書斎にまで案内をされている。

相手がシンを知っているということはつまり、ラトフはシンの知っている幼馴染みのラトフということになる。

先導していた執事が一つの部屋の前で足を止めた。

「ここでございます。では」

執事はそう言って一礼をし、立ち去った。

シンは目の前にあるドアノブをゆっくり回し、引く。中に入ると一人の男が部屋の奥で椅子に座り、待ち構えていた。笑みを浮かべ、机に肘を置いて頬杖をついている。

「お前、本当にラトフか？」

驚き顔のシンの問いに、男は頷く。

痩身な体型は変わらない。顔の輪郭にも昔の面影が残っている。しかし身にまとっている空気が完全に別人だった。瞳は自信でキラキラ輝いている。リノンに言っていたように過去のラトフは暗い性格だったのだが今のラトフの性格は外に向かっていた。最初ラトフが街の統治者と聞いて務まるのかと半信半疑だったが、今なら頷ける。

ラトフはシンの反応を楽しんだ後に、ひと先ず座れば、と向かいのソファを勧めた。シンはそれに従い、ふかふかのソファに腰を沈めると、棚からワイン瓶とグラスを二つ取っているラトフが声をかけてきた。

「よく来てくれたね。ずっと会いたいと思っていたんだ」

歓迎の意を示しているのだが、優越感も混じっていた。

「俺もそう思ってから会いに来たんだ」

ラトフの態度に気にせず、シンは室内の高級な調度品に舌を巻く。

「そしたらこの有り様だ。あくどいことの二つや二つやったのか？」

からかい半分で言うと、ラトフは苦笑いを浮かべながら、

「まさか。苦勞に苦勞を、幸運に幸運を重ねてようやくこの地位を手にいれたんだよ。頭腦を頼りに前にここを治めていた人にとりいってもらってね。そこからこつこつと頑張ったのさ」

ラトフはワイン瓶から黒褐色の液体をグラスに注ぎ、シンに手渡す。そして自分のグラスの分も注ぐとシンとテーブルを挟んだソファに座り、グラスを持っている手を突き出す。

「君はあれかい？未だにリアリルを？」

刹那、シンが陰のある面持ちを見せた。が、すぐに引つ込め、氣を取り直すように軽口を叩く。

「ああ。全くだこほつつき歩いてるんだよ、あいつは。探すほうの身にもなれつつうの。ともかく乾杯」

「乾杯、シン」

シンは乾杯にしては少し乱暴に自分のグラスをラトフのグラスに当て、一気に飲み干した。対照的にラトフは味わいながら飲んでいる。その優雅な振る舞いに改めてシンは変化を感じる。

「ガキの頃は欲の強いくせに根暗で、自己主張の欠けていたのにな。どういった心境の変化だ？」

ラトフの額がぴくりと動いた。しかし表情は依然笑顔のままでいる。グラスをテーブルに置いてから一言。



「僕も昔話をひとついいかな？」

「そうやって断る必要もないんじゃないのか」

自分でグラスにワインをつぎ、シンは二杯目にかかるうとしていた。

「僕は昔から君が嫌いだった」

グラスがシンの口に達する前に止まった。

笑顔でラトフは話を続ける。けして心からの笑顔ではなく、仮面のように無機質で冷たい笑みのまま。

「いつも君との遊びは君の得意分野からの遊びだったね。知的なところが一切かわっていない体力的な遊び。だから勝負すればいつも僕が負けた。負け続けた。そのたびに君は、なにやってるんだっていったよ。屈辱的だったよ」

「遊びで頭を悩ませてどうする？楽しむためのものなら、遊びつてのは？」

言外にお前は馬鹿か、という含みを持たせとどめとばかりにふてぶてしい笑みを送った。ラトフの表情が凍りつき、仮面がはがれたように潜めていた憎悪の素顔をむきだしになる。

「そう、その顔だよ！その顔が癪に障るんだ！君が邪魔なんだ。無力だった忌々しい人間時代を思い出させる」

そこまで喋るとラトフは内面を吐露したことを恥じているのか、  
そこでいったん口をつぐんだ。代わりにシンが感情を表に出さずに  
口を開く。

「その様子じゃ、どうやらあの噂は本当なんだな……今の地位に  
就くために邪魔ものを裏で皆殺しにしたってやつだ」

それはニルから聞いた話だった。そのときはありえないことだと  
鼻で笑ったが、今のラトフの様子では急激に真実性を帯びてしまう。

「ああ、そのことが。本当のことだよ」

ことも何気にこたえてきた。

「特別にどうやったか見せてあげるようか」

立ち上がり、右手をシンにむかって真っ直ぐ突き出す。男にして  
は華奢な手。まるで武器を一度も振ったことがないようで、人を殺  
すには非力。

そう第一印象を受けた瞬間、まるで至近距離で額にナイフでも突  
きつけられたような危機感が過った。反射的にシンは横に飛ぶ。置  
き去りにされたグラスが宙に漂い、後からソファーの上に落ちて、  
中身をぶちまける。

「いい反応だね。そのままぼっとしていたらあの世に逝っていたよ」

ラトフは依然右手を突き出したまま固まり、態勢を整えたシンに  
今度は心底愉快そうな笑みを送る。

自分が殺されそうになっていたのはわかった。だが具体的にどんな手段で行われたのが今一つ理解できない。状況を読み取るうと周囲に目を配らせ、そこでラトフの右手の延長線上にある壁に小さな穴が空いているのに気づいた。なんだ、あれは？新しいタイプのリフレクでやったのか？聞いたことがない。それとも……

「お前……憑一者だったのか？」

確かめるように発した問いは、ラトフを尚更喜ばした。

「そう。いい言葉だね、それ。僕は選ばれた。つよくなっただよ。無力な人間でも適格していない憑き者でもない。進化したんだ。今のだって僕の中のアースを指先から不可視に鋭利に表出させてみたのさ」

「まるでガキが新しいおもちゃでももらったみたいはしゃぎようだな」

シンは馬鹿にしたような笑みを浮かべつつも、それってよけるのきつくねと内心冷や冷やだった。それを見抜いているのか、ラトフも余裕を崩さない。

先手必勝とばかりにシンは腰のホルスターからイオットを抜き、数発放った。

イオットは衝撃を発生させる灰色の反晶石を使って、衝撃に指向性を持たせることにしたリフレクだ。腹部に食らえばしばらく悶絶する程度に作られている。

しかし、

「そんなものも効かないよ」

ラトフはシンに向かってただ右手を前に差し出しただけで、ラトフに届く前に衝撃が何かにぶつかった音をたてて四散した。その際、ラトフの右手を中心に半円状で半透明な何かが展開しているのが一瞬姿を見せた。さっきは攻撃に、今度は防御にアースを使ったのだろうか。

「ちっ」

初っ端から打つ手なしのこの状況。相手が反則にもほどがある。舌打ちせずにはいられない。戦うより戦略的撤退をしたほうがいい。

「そついえば、僕の噂が流れているようだけど、有名度なら君のほうが高いんじゃないのかな？破天荒な性格のせいもあるけど、やっぱりアースにつかれていない人間っていうのは珍しいんだね。でも、だから弱いんだよ」

最後の一言の語気が強まった。ラトフの声に潜む暗い殺意を察して本能が危険と警鐘を鳴らした。弾かれるようにシンはその場から離れる。

瞬間、シンはラトフの指先から限りなく透明な水色が突出し横切るのを目に映った。

シンの元いた場所の後方にあつた窓に小さな点が開く。どうやらこれが先ほど同じアースを使った攻撃のようだ。よけたシンは、この場においても状況は不利と、ラトフの書斎が三階に位置すると知

りながらそのまま躊躇なく窓に突っ込んだ。盛大な音をたてて、窓ガラスが割れシンは姿を消した。

「おいしい」

ラトフがそのまま立っていると、すぐに執事が何事かと駆けつけてきた。

「どうかいたしましたか？」

「先ほどの客人が命を奪おうと僕を襲ったが失敗し逃げた。追え」

「かしこまりました」

礼をもそこそこに、執事は書斎から出ていく。

「さて僕も行くか」

口元を歪ませて、ラトフも窓から飛び降りた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1521h/>

---

ニルレイ

2010年10月15日21時18分発行